フィリピン戦線の衛生兵

初めての軍隊生活

大正七（一九一八）年十一月、第一次世界大戦がドイツの降伏によって終わりました。この年の十一月五日、わたしは六人兄弟の三男として東京で生まれました。

第一次世界大戦が終わっても、世界が平和になったわけではありません。日本をふくめ、それぞれの国が戦争へと歩み始めていたのです。

大正十二年、わたしが五歳のとき、関東大震災が起き、東京を中心に大きな被害をもたらしたのです。戦争に向かおうとする足音と大震災。

そうした中でも、どうにか生きのびてきたわたしたち家族でした。

昭和六（一九三一）年、とうとうおそれていたことが起きてしまったのです。※満州事変を皮切りに中国本土へと戦争は広がっていったのです。

わたしが※徴兵検査を受ける年齢、二十歳になったころは、すでに中国大陸での戦闘は激しさを増すばかりでした。

昭和十三年六月、徴兵検査に合格し、※補充兵となりました。補充兵であっても、いずれ戦争に行かなくてはならないと覚悟は決めていました。

次の年、昭和十四年十二月十日。臨時召集を受けて入隊となり、昭和十五年一月十二日には、※衛生兵として臨時第一陸軍病院に配属され、内科勤務を命ぜられました。

※満州事変……一九三一年、満州（中国東北部）で起きた戦争。この結果、満州国がつくられた。
※徴兵……国が国民を義務として兵士にすること
※補充兵……現役の兵隊が不足している分を補うために、集められた兵士
※衛生兵……病気やけがをした人を救護する兵士

昭和十五年九月一日、選抜で一等兵に進級、昭和十七年十一月二十五日、召集解除で除隊となりました。その間、昭和十五年には紀元二千六百年を記念して臨時召集兵だけにあたえられた「支那事変従軍記章」を受けました。それが第一回の軍隊勤務でした。

目的地アルタチオまで①

昭和十六年十二月、太平洋戦争が勃発しました。わたしは第二回目の召集を受け、昭和十九年八月三十日、東京第一陸軍病院に入隊となりました。

九月五日、フィリピン戦線の部隊に医療品や食料、軍事用品などを運ぶため、病院内で第一二九※兵站病院（別名「威三八八九部隊」といった）が編成されました。いよいよ、フィリピン、アルタチオまでの長旅です。

軍人として、また衛生兵として初めての国外、それも戦場の最前線に向かう勤務です。わたしは緊張しました。

十月十二日、東京を出発し、門司に着いたのは、翌日でした。それから、十一月二日まで待機となり、十一月三日、日洋丸（日本郵船）に乗船したのです。

途中、台湾の基隆に寄港し、その後高雄に上陸、四日間の滞在です。十一月二十五日には、アメリカ軍の潜水艦が出没して魔の海と伝えられていたバシー海峡も、何事もなく無事通過することができました。

十一月二十八日にはフィリピンのアバリ沖に到着、翌日北サンフェルナンドに入港し、②マニラに上陸したのは東京を出てから五十日目の十二月一日でした。

着くと同時にマニラ市サンタメサの宿舎に入り、必要な品物を補給し、北部ルソンに向かって、急ぎマニラを出発したのです。

わたしの所属する部隊では、三十五歳以上の補充兵が多く、重い荷物を運ぶの

※紀元……歴史上で年数を数えるもとになる最初の年。日本では、神武天皇即位の年（西暦の紀元前六六〇年）を元年とする、独自の暦が使われていた

※兵站病院……戦場につくる臨時の病院。兵站とは、軍の作戦を助けるために、物資の補給や連絡、修理などを行う機関

はとても大変でした。

目的地アルタチオには、十二月十八日に到着。

三十軒くらいの集落と学校を利用して、第一二九兵站病院としました。ここで少し落ち着いたので、途中で受けていた上等兵進級を中隊長に報告しました。

フィリピン戦線（逃避行）

昭和二十年一月三日、榎本中尉にポソルビオに行くようにと派遣命令が出ました。③

いっしょに行くことになっていた班長の出口伍長が、出発間際にマラリア熱におかされて起き上がることができなくなりました。

急きょ、伍長の代わりにわたしが行くようにと命令が下りました。わたしは先任※者として他の者十人を連れてポソルビオに行きました。

一月五日、マニラ方面から前線の患者六人が送りこまれてきました。そして、弱

り切った患者の手当てに追われている間に、アメリカ軍の反撃が始まったのです。

かつて、フィリピンでの最初のころの戦いの時、日本兵が上陸していたリンガエン湾には、数百隻にものぼるアメリカ艦船が集結して、これから上陸するアメリカ軍を前もって守るために、わたしたち日本軍に向けて、激しい艦砲射撃と空爆が行われたのです。

この容赦ない空爆で宿舎の一部は破壊され、銃を持つことさえできずに逃げまどうわたしたちは、爆風で地面にたたきつけられました。生きていたのが不思議なくらいでした。アメリカ軍の反撃は四日も続きました。

一刻も早く、ポソルビオから脱出しなければなりません。

わたしたちは榎本中尉と共に、焼け残った荷物を車一台に積みこみ、敗残兵の姿で命からがらアルタチオに逃げて帰りました。

しかし、アルタチオに本隊の姿はなく、すでにバギオ[4]に向かって出発したあとで

※先任者……先にその任務または地位についている者

した。

そこには、一部の班が残っているだけでした。

体を休める時間などありません。わたしは班にもどり、バギオに向かうことになりました。

この間、ナギリアン道路、ベンゲット道路には四つのキャンプ地がありました。これらを目指しながらの、いよいよ苦しい行軍の始まりです。

第一キャンプに一月七日から八日、第二キャンプに一月八日から二十九日、第四キャンプに一月三十日から二月四日、第六キャンプに二月四日から三月九日と、バギオまでは二か月ほどかかっての行軍でした。道路といっても舗装されているわけではありません。道とは名ばかりで上ったり下ったりの連続、険しくつらい、長い長い道のりでした。

行軍の途中で力つきて、班長の志村曹長が亡くなりました。戦友も数人、病死してしまったのです。

先を急ぐわたしたちは、そのなきがらにただ手を合わせることしかできませんでした。

やっとの思いでバギオに着いたのですが、体を休める場所といえば、山あいの松林の中に掘った穴蔵です。そこに四、五人ずつ入って寝るのです。

バギオの山の夜は気温が下がってとても寒く、山を下って兵舎まで食事を取りに行くのですが、食べるときには冷たくなっていました。

ここ、バギオの日本軍基地病舎には、負傷や病気と、さまざまな患者が二百人ほど入っていました。わたしもとうとうマラリアにかかり、自分の隊の患者十七人と共に別の建物に収容されました。

四月二十四日ごろ、病院本隊はわたしたちより先に退去したと、看護婦が知らせてくれました。そのとき初めて、置き去りにされたことを知ったのです。

次の瞬間、わたしはさけんでいました。

「こんな所で死んではだめだ！　生きていっしょに日本に帰ろう！」

しかし、かなり重症の患者が多く、山を下りるには軽症のわたし自身でも大変なことでした。

歩行が困難な患者には肩を貸し、はげまし合って歩き続けたのですが、途中、力つきてたおれる患者をどうすることもできませんでした。ふと気がついたときには、歩き続けたのは十七人の患者のうち、四人だけでした。

途中、山を下ってくる中西上等兵と会いました。

「トラックで十二キロ先の地点まで行くから乗っていけ」

と言われ、乗せてもらいました。

十二キロ先には、旭兵団の患者と、わたしの隊の藤田士官がいました。藤田士官から、

「泉村へ患者といっしょに早く行け」

と言われ、四月初めに着きました。そのころになって、わたしのマラリアも快方に向かい、元気を取りもどすことができました。内科班に入り、再び衛生兵として勤

務を続けることができました。

四月末ころ、隊長以下、士官、戦友三人とトリンダット分院に出張しました。

途中、山の中に分け入っての行軍中、思わぬ空爆に見まわれました。先を行く隊長、士官は無事でしたが、わたしと戦友は直撃を受け、わたしは戦友の血を全身に浴びたのです。

今、言葉を交わしていた戦友が、わたしの目の前で爆死してしまったのです。奇跡的に助かったわたしたちは、山から山をはいずりながら生きのびました。

それからのわたしは一か所に落ちつく暇もなく、走り回っているうちに自分の隊ともはぐれ、別の隊の兵や患者と共に本隊を目指して進んでいるだけでした。どこにいるのかも分からず、道もない山を分け入り、谷をわたり、やっとの思いでカヤバ峠の検問所に着いたのは、七月半ばごろになっていました。

敗戦　そして収容所へ

昭和二十年八月末ごろ、本隊の兵隊とも会うようになりました。九月に入って間もなく、村山曹長と会いました。

「元気だったか、福原」

と声をかけられ、再会を喜び合いました。そのとき初めて終戦を知ったのです。でも、これでわたしの任務が終わったわけではありません。衛生兵としての最後の任務が残っています。患者と死者の確認に、小林士官とともに行動しました。本当につらい確認作業でした。

九月中ごろ、キャンガンで武装解除[※]を受けました。そして米軍の収容所に向かったのです。昭和二十年十月二十五日、わたしたち約百人が第一陣として、バタンガス収容所[⑥]に入所しました。ここでのわたしたちの生活は、道路の修理、アメリカ軍やフィリピン軍のキャンプの仕事などでした。

※武装解除……戦いに負けた者や捕虜などに対して、その兵器を強制的に取り上げること

収容所でのキャンプ生活は、体力もない上に仕事がつらく、食料も少ないため、不平不満が出て、人々の間で、さまざまな争いやいさかいが始まるようになってきました。

中隊長、小隊長も秩序の乱れに困り果て、どうしたらいいものか、みんなで話し合いました。一回目の軍隊生活のときによく演芸会をしたことを、わたしはふと思い出して、そのときの話をしました。だんだん話を進めていく間に次第に盛り上がり、気持ちに冷静さを持ちはじめたのです。アメリカ軍の所長から「ＯＫ」の許可を受けることもできました。

演劇が根っから好きだったわたしは、芝居や落語の台本を何本も書き上げました。それをみんなで演じるのです。

暗かった収容所の中に、少しずつ明るい笑顔がもどってきました。

復員（日本へ）

昭和二十一年十二月十八日。いよいよ日本へ帰ることになり、アメリカの復員船リバティ船に乗りこみました。

日本に帰れる喜びとは裏腹に、激戦のあったフィリピンの山々、マニラの町並み、戦場で死んでいった戦友、爆撃、砲撃で逃げ回った日々、あの山野に残されたままのたくさんの戦友たちのことを思うと、知らず知らずに涙が流れ、わたしは、ただ、ただ御霊に黙とうをささげました。そして、十二月二十六日、名古屋港に上陸しました。

上陸して見る風景は、工場や家屋の焼け跡ばかり、戦災の傷あとを大きく残していました。

名古屋港の復員局の部屋には、全国からの家族の手紙が山のように積まれていました。

その中に妻からの手紙があったのです。

それによって、わたしは妻の実家に帰ることができました。
昭和十九年十一月、フィリピンに向けて門司を出港して以来の、約二年の歳月は何のための戦いだったのでしょう。悪夢のような日々でした。
戦争は悲惨なことの連続です。
今は平和に見える日本にも、約六十年前、このようなことがあったのです。
一人ひとりの大切な命をうばい合う戦争を、二度としてはなりません。
そんな思いをこめて、この手記を書きました。

（原作　福原良忠「米軍反攻下のフィリピン戦線の衛生兵」）

※復員……兵士の身分から民間の人に戻ること